

## 「北海道の脳神経外科の歴史」(その2)

北海道大学 名誉教授  
札幌秀友会病院 名誉院長  
阿部 弘

### Ⅳ. 旭川医科大学 脳神経外科

#### 1) 米増 祐吉 教授時代

旭川医科大学の脳神経外科は、昭和52年に開講し、同年12月に米増祐吉（九州大学）(写真1) が教授に就任した。はじめの数ヶ月間は、同じく九州大学から赴任した大神正一郎助教授（写真2）との二人で、準備に忙殺されたという。昭和53年4月に診療が開始された。その時には、田中達也（九州大学）(写真3) が講師として加わり、さらに、人手不足で支援を要請された都留美都雄（北海道大学）は、三森研自（写真4）及び佐古和廣（写真5）を、それぞれ講師、助手として送りこんだ。やがて、代田剛（北大）(写真6) も助手として加わった。

診療開始とともに、主として道東・道北地域から患者が来院し、毎年、前年度比2割増しに患者が増えつづけ、地域医療に大きく貢献してきた。

教室の研究テーマは、機能的下垂体腫瘍の研究、難治性てんかんの外科治療、てんかんの基礎的研究、虚血性脳血管障害の循環動態及び外科治療、小児脳神経外科学等（表1）であった。



写真1: 米増祐吉



写真2: 大神正一郎



写真3: 田中達也



写真4: 三森研自



写真5: 佐古和廣



写真6: 代田 剛

表1 旭川医科大学  
米増 祐吉 教授時代の業績  
(昭和53年～平成9年)

1. 機能的下垂体腫瘍の研究
2. 難治性てんかんの外科治療
3. てんかんの外科治療
4. 虚血性脳血管障害の循環動態
5. 小児神経外科の推進

米増は、機能的下垂体腫瘍の外科治療を自ら推進し、とくにCushing病について多くの経験を発表して北海道のレベルアップに努めた。プラクチン産生腫瘍の経験豊かな佐藤修（札幌医大）と、地方会では熱い議論をかわした。

昭和54年には、旭川医科大学1期性の鈴木望、中井啓文、福田博、牧野憲一の4人が入り、同年7月には貝嶋光信（九州大学）(写真7) が助手として加わり、教室はいっぺんに賑やかになった。米増、大神は、ともにオールラウンドプレーヤーで、腫瘍、脳血管障害、小児脳神経外科など幅広い分野で実績をあげ、教室員及び学生の教育に努めた。

米増は学生の教育に熱心で、毎週金曜日の臨床実習の学生の「まとめ」（総括）の検討会には、余程のことがないかぎり、自ら指導にあたった（写真8）。米増の時間をかけての熱心な指導は学生間で評判となり、やがて、米増の「関門」を通れば他科の実習は楽勝、といわれるようになった。北海道地方会においても米増の発表は仲々



写真7: 貝嶋光信

写真8: 臨床実習  
「まとめ」(総括)  
検討会風景

に厳しく、北大や札幌医大の若手はよくやりこめられた。後でみると、九大時代の米増は、“いちゃもん米増”といわれていたというのうなずけた。米増は、テニスもゴルフも上手で、北日本清談会の時のテニスの試合では、筆者はいつも米増の華麗なボレーにやられっぱなしであった（写真9）。



写真9:  
テニスコートの米増

大神は助教授として米増を補佐し、診療に研究に尽力した。大神のおだやかで温和な人柄は誰からも好かれ、道内の多くの脳外科医達と親交を深めた。テニスとゴルフは、米増よりも上手であった（写真10）。



写真10:  
テニスコートの大神

三森は、都留に命ぜられて旭川医大へ赴任したが、よく気がついて誰にも負けない気くばりの人柄で、教室内をまどめた。そして、北海道の医療事情に疎い米増に、道内の医療の現況を伝授した。

田中達也は、モントリオール神経研究所へ6ヶ月間留学し、帰国後、てんかんの研究及び外科治療に実績をあげ、てんかん及び脳波関係のジャーナルに次々と論文を発表した。なかでも、multiple subpial transection (MST) の研究では国際的な評価をえた。これらのてんかんの研究で日本をリードする業績をあげた結果、J.A.WADA奨励賞の受賞者が、昭和58年田中達也、昭和63年福田博、平成2年田中滋也と、旭川医大から続出した。

代田は、神経病理学の研究で実績をあげ、地方会では、各施設の発表に厳しい質問をあげた。代田は野球少年で、医局チームの監督兼主将としてキャッチャーを務めて陣頭指揮した。草野球なのに、内野ゴロの走者を追って一緒に一塁まで走った。

佐古は、モントリオール神経研究所のL. Yamamoto教授のもとへ2年間留学した。帰国後、虚血性脳血管障害の循環動態及び外科治療で多くの業績をあげ、研究の成果を、Stroke、J. Cereb. Blood Flow Metab. などに次々と発表した。やがて、オートラジオグラフィによる脳循環代謝研究の第一人者として認められ、「脳神経外科」の総説の執筆を依頼された。

貝嶋は、CNRS（フランス国立中央科学センター）へ、てんかんの研究で2年間留学し、帰国後、田中達也との共同研究で、ラット扁桃体へのカイニン酸注入によるてん

かんモデルの実験的研究で大きな成果をあげた。

平成9年3月、米増は定年退官した（写真11）。米増時代に主催した学会は表2の如くである。また、米増時代に開設した関連施設は表3の如くである。



写真11: 米増祐吉

|       |                  |
|-------|------------------|
| 表2    | 米増 祐吉 教授の主たる主催学会 |
| 昭和62年 | 第10回 日本神経外傷学会    |
| 平成2年  | 第18回 日本小児神経外科研究会 |
| 平成4年  | 第16回 北日本脳神経外科連合会 |

|            |          |
|------------|----------|
| 表3         | 関連施設 開設  |
| 回生会大西病院    | 元生会森山病院  |
| 小林病院       | 北見赤十字病院  |
| 名寄市立病院     | 北晨会恵み野病院 |
| 養生館苫小牧日翔病院 |          |

## 2) 田中 達也 教授時代

平成9年、第2代教授に、田中達也助教授（写真12）が就任した。田中は、てんかんの基礎的・臨床的研究をさらに推進し、多くの業績をあげ、平成17年、日本てんかん学会の理事長に就任した。



写真12: 田中達也

中井啓文（写真13）が助教授に就任し、脳血管障害の循環代謝の研究と外科治療で実績をあげた。程塚明（写真14）は、腫瘍を専門とし、臨床及び研究で成果をあげた。橋詰清隆（写真15）は、てんかん及び機能神経外科を専門とし、実績をあげた。



写真13: 中井啓文

田中は、旭川へ赴任した頃のテニスの腕前は、筆者とどっこいどっこいであったが、そのうちに、あっという間に上達して、筆者の敵ではなくなってしまった。田中を語る時に、ワインの話をせずに田中を語ることはできない。田中のワインの造詣の深さは驚くべきもので、ティースティングの時の動作には風格があった。旭川での学会の懇親会がよく行われた郊外のレストランで、田中はソ



写真14: 程塚 明



写真15: 橋詰清隆

ムリエ顔負けのワインの解説をした(写真16)。



写真16: 郊外のレストランにて

“そのうち、ロマネコンテを一緒に飲みましょう!”  
が田中の口癖であったが、平成21年3月、田中は定年退官  
して九州へ帰ってしまった。

田中達也教授時代の業績は、表4の如くである。解説し  
た関連施設は、ふらの西病院及び深川市立病院である。

|    |                                          |
|----|------------------------------------------|
| 表4 | 旭川医科大学<br>田中 達也 教授の業績<br>(平成9年～平成21年)    |
| 1. | てんかんの基礎的・臨床的研究の集大成<br>平成17年 日本てんかん学会 理事長 |
| 2. | 小児神経外科の推進                                |
| 3. | 脳血管障害の循環代謝                               |

### 3) 鎌田 恭輔 教授時代

平成22年1月、鎌田恭輔(写真17)  
が第3代教授に就任した。鎌田は、  
昭和63年旭川医科大学を卒業し、北  
海道大学脳神経外科教室に入局した。  
7年後にドイツと米国へ留学し、帰  
国後の平成15年に東京大学脳神経外  
科へ助手として赴任し、その後、講  
師として斉藤延人教授の薫陶をうけ、平成22年、母校旭  
川医科大学の教授に赴任したのである。

鎌田は北大の研修医時代からがんばり屋であった。  
MRIの研究で、日本脳神経外科学会ガレーヌス賞(平成6  
年)、及び北海道医学賞(平成9年)を受賞している。鎌  
田の専門領域は、脳血管障害の外科治療であるが、研究面では、脳  
機能画像と電気生理学的モニタリ  
ングを融合した血管障害、腫瘍、  
てんかん等に対する外科手術で成  
果をあげ、この領域で日本をリー



写真17: 鎌田恭輔



写真18:  
旗門を通過する鎌田

ドしている立場である。鎌田はスキー  
が得意で、旭川医大の学生時代はスキ  
ー部に所属し、北大の研修医時代にフ  
ラノで開催された白馬セミナーの回転  
競技で優勝した(写真18)。その時、杉  
田虔一郎教授(当時信州大)に、“学問  
でも全国区にならないければダメだ!”  
と云われ発奮したのである。

鎌田の赴任後の旭川医大では、画像・  
機能融合した脳神経外科手術法を確立  
し、multi-modalityを駆使した手術支援  
システムにより、血管障害や腫瘍など  
の手術を推進している。安永良悟(写真19)は、脳腫瘍  
手術とその集学的治療で成果をあげている。和田始(写  
真20)は、血管内治療で実績をあげている。



写真19: 安永良悟



写真20: 和田 始

### V. 中村記念病院

昭和42年、中村順一(札幌医大)(写  
真21)は、19床の中村脳神経外科医  
院を札幌市に開設した。当時、脳神  
経外科専門の開業医は全国にもおら  
ず、日本初の脳神経外科専門の開業  
であった。スタッフは、札幌医大よ  
りの出張医で構成され、その後、中  
村医院は急速な発展をとげ、早くも3  
年後の昭和45年には、9階建332床の大  
病院を建築して移転した。同時に日本  
脳神経外科学会専門医指定訓練施設A  
項を取得した。

同年、田中靖通(写真22)が札幌医  
大より副院長として赴任した。

昭和50年には、札幌医大の新卒者で、大学の医局に入  
らず、直接、中村脳神経外科病院へ入局した3人がいた。  
武田利兵衛、松崎隆幸、和田啓二である。後に西谷幹雄  
も続いて入局した。昭和53年には、橋場輝芳札幌医大  
名誉教授が、初代会長として迎えられた。新卒の中川原譲二らが入局した。

昭和54年には、堀田隆史、徳田禎久  
が札幌医大の医局を辞して入局した。  
5月には、新卒の佐々木雄彦、瓢子敏  
夫が入局した。



写真21: 中村順一



写真22: 田中靖通



写真23: 末松克美

昭和45年9月、末松克美（札幌医大）（写真23）が、脳神経疾患研究所所長として迎えられた。同年12月、病院名が中村記念病院と改められ、現在地へ新築移転（450床）した（写真24）。



写真24: 中村記念病院

この頃の中村記念病院は、脳血管障害を中心として実績をあげ、脳神経外科の専門病院として、全国にその名を轟かす存在となった。

昭和57年には、ニセコカンファレンスの第1回が開催された。これは現在まで30回以上続いており、国内の著名な先生方が講演に招かれている。昭和63年には病床が725床となった。この年から、「北海道脳神経疾患研究所医誌」（写真25）が毎年発刊されることになり、優れた論文が掲載されてきている。平成2年には、「モービルMRI」（写真26）による脳の検診が、道内の檜山管内を皮切りに開始された。



写真25: 北海道脳神経疾患研究所医誌 創刊号



写真26: モービルMRI検診車

同年、萩原良治（写真27）が洞爺協会病院院長の職を辞してリハビリテーション部長に赴任してきた。平成3年には、「ガンマナイフ」（写真28）を道内で初めて導入し、福岡誠二（写真29）がとり組んで実績をあげ、沢山の患者がその恩恵にあずかっている。



写真27: 萩原良治



写真28: ガンマナイフ



写真29: 福岡誠二

このように、時代を先取りした斬新な計画とその実行によって多くの実績をあげ、中村記念病院は、多くの優れた人材を育て上げた。武田利兵衛（写真30）は、破裂脳動脈瘤の急性期手術で実績をあげ、日本脳神経外科学会総会でシンポジストを務めた。また、バイパス手術でも成果をあげた。佐々木雄彦（写真31）も手術を得意とし、脳血管障害、脳腫瘍などの手術でよい成績をあげた。



写真30: 武田利兵衛



写真31: 佐々木雄彦

宇佐美卓（写真32）、瓢子敏夫（写真33）は、血管内治療の豊富な経験から道内をリードする立場となり、瓢子敏夫は平成11年、北海道脳神経血管内治療研究会を立ち上げ、第1回会長を務めた。



写真32: 宇佐美 卓



写真33: 瓢子敏夫

平成8年、中村博彦（東京大）（写真34）が、都立駒込病院脳神経外科医長の職を辞して赴任してきた。平成9年、中村順一は理事長に就任し、中村博彦が病院長並びに北海道脳神経疾患研究所所長に就任した。中村博彦は、脳腫瘍の治療を精力的に推進し、北海道脳腫瘍懇話会を立ち上げ、第1回会長を務めた。



写真34: 中村博彦

平成13年、中村記念病院の創立者で最大の功労者の中村順一（写真35）が逝去した。中村順一は、もち前の明るさと、バイタリティーの塊のような熱い情熱をもって仕事にあたり職員を陣頭指揮した。「朝のこない夜はない」をキャッチフレーズとして、豪放ながらも細やかな気くばりをして、部下を愛し、職員を愛した優れたリーダーであった。



写真35: 中村順一

平成15年、中村博彦は、中村記念南病院を札幌市南区川沿に開設し、武田利兵衛が病院長として赴任した。それまでの昭和59年から昭和63年迄の間に、徳田禎久、西谷幹雄、藤原秀俊、中垣陽一らが、それぞれ道内に開業した。

平成19年、中村記念病院は、開院40周年を迎えた。今や、年間の手術件数は1700-1800件、ガンマナイフ600件の実績を誇る国内有数の病院となった。

中村博彦理事長（写真35）の指揮のもと、職員一丸となったチームワークの良さにより、発展の一途をたどり、人材も豊富に育成されてきた。堀田隆史（写真37）は副院長として医療の質と安全の向上を目指して努力している。中川原譲二（写真38）は、虚血性脳疾患の循環代謝動態とその治療に関しては、日本をリードする立場となり、Strokeへ論文を発表し、講演に全国を飛び回っている。伊東民雄は脳腫瘍、安斎公雄は脊髄外科、大里俊明、上山憲司は脳血管障害と、それぞれ活躍し、実績をあげている。

中村記念病院の業績は表5に、関連施設は表6に示す如くである。

表5 中村記念病院の業績

1. 脳卒中の治療（脳卒中センター）  
破裂動脈瘤の急性期手術  
虚血性脳血管障害の循環動態と外科治療
2. 脳腫瘍の治療  
覚醒下手術  
NAVIGATION、各種モニターによる手術
3. 血管内治療  
第1回 北海道脳神経血管内治療学会 開催  
第20回 日本脳神経血管内治療学会 開催
4. ガンマナイフ治療

表6 中村記念病院の関連施設

|                   |           |
|-------------------|-----------|
| 禎心会病院             | 函館脳神経外科病院 |
| 札幌秀友会病院           | 滝川脳神経外科病院 |
| 嶋田脳神経外科クリニック（小樽）  |           |
| わだ脳神経外科クリニック（苫小牧） |           |
| 脳神経セントラルクリニック（函館） |           |
| 豊岡中央病院 脳神経外科（旭川）  |           |



写真36: 中村博彦



写真37: 堀田隆史



写真38: 中川原譲二

## VI. A項施設（旧制度）

前述した札幌医科大学、北海道大学、旭川医科大学、中村記念病院の他に、北海道内の多くの公的病院及び私的病院が、道民の健康の為に尽力してきた。紙面の関係で、全ての脳神経外科施設については記載できないので、日本脳神経外科学会専門医訓練施設の旧制度におけるA項施設について述べる。

### 1) 道南地区

#### (1) 市立函館病院 脳神経外科

市立函館病院脳神経外科は、昭和44年に開設された。

平井宏樹（札幌大）（写真39）が、初代部長として就任した。温厚で誠実な平井は、アカデミックなレベルを保ちながらも、救急患者の受け入れに尽力し、道南の医療に多大な貢献をした。2代目部長の丹羽潤（写真40）は、脳血管障害や脳腫瘍の手術で優れた成果をあげている。年間手術件数200件、血管内手術件数50-60件の実績をあげ、ヘリポートを有して、重症の外傷や脳卒中の患者のために貢献している。



写真39: 平井宏樹



写真40: 丹羽 潤

#### (2) 函館脳神経外科病院

函館脳神経外科病院は、昭和62年に西谷幹雄（写真41）が、中村記念病院より独立して開業した。西谷は函館出身で知名度も高く、たちまち実績をあげた。年間手術件数は400件をこえ、脳卒中センター、ストロークユニットも設置されている。



写真41: 西谷幹雄

#### (3) 函館新都市病院

函館新都市病院は、昭和62年に伊藤丈雄（札幌大）（写真42）が開設した。急性期から慢性期までの一貫医療を実践し、脳卒中地域連携協議会、地域リハビリテーション協議会の事務局を担当して、地域に貢献している。年間手術件数は250件である。伊藤は、北海道医師会の理事とし



写真42: 伊藤丈雄

でも活躍している。

## 2) 後志、日胆地区

### (1) 小樽市立脳・循環器・こころの医療センター（旧市立小樽第二病院）脳神経外科

昭和49年に開設され、三森研自（北大）（写真43）が初代部長として赴任した。三森は積極的に救急患者を受け入れ、後志の地域医療に多大な貢献をした。

昭和53年、三森は、旭川医科大学の脳神経外科の講師に赴任して小樽を去った。同年、佐藤正治（北大）（写真44）が2代目部長として赴任した。佐藤は、脳血管障害の治療で実績をあげ、やがて病院長となって、同院を後志地区の脳卒中・心疾患のセンターとしての地位を不動にした。平成10年には、越前谷幸平（写真45）が部長に就任した。越前谷は小樽出身で知名度も高く、患者数、手術件数が倍増した。平成13年、馬淵正二（北大）（写真46）が4代目部長に赴任し、積極的に救急患者を受け入れて更に発展させ、やがて病院長に就任した。馬淵は小樽病院の改築計画にも参画している。年間手術件数は400件である。



写真43: 三森研自



写真44: 佐藤正治



写真45: 越前谷幸平



写真46: 馬淵正二



写真47: 大川原修二



写真48: 松本行弘

### (2) 大川原脳神経外科病院

昭和45年、大川原修二（札幌医大）（写真47）が開設した。当時、室蘭地域には脳神経外科の施設がなく、大川原は、急性期から慢性期までの一貫した医療を貫き、地域に貢献した。やがて神経内科も増設した。平成22年、松本行弘（写真48）が院長に就任した。年間手術件数は200件である。サテライトに「とまこまい脳神経外科」がある。

### (3) 王子総合病院 脳神経外科

王子総合病院脳神経外科は、昭和42年に開設された。日胆地方ではもっとも歴史のある施設である。初代部長は、高田育郎（札幌医大）（写真49）、2代目部長は竹田正之（札幌医大）（写真50）で、1～2年の短期赴任であった。昭和

42年には、世界で最大（？）の400gの脳腫瘍を摘出したと報告している。昭和45年小林計理（札幌医大）（写真51）が部長に赴任して19年間務めた。平成元年、宮尾邦康（札幌医大）（写真52）が部長を務め、平成7年から現在まで、柏原茂樹（札幌医大）（写真53）が部長を務め、日胆の地域医療に貢献してきている。年間手術件数は150件である。



写真49: 高田育郎



写真50: 竹田正之



写真51: 小林計理



写真52: 宮尾邦康



写真53: 柏原茂樹

## 3) 中央地区

### (1) 市立札幌病院 脳神経外科

昭和40年に開設され、竹田保（北大）（写真54）が初代部長に就任した。竹田は精力的に活躍して診療実績をあげ、市立病院の救命救急センターの立ち上げと充実に尽力し、後に病院長に就任した。2代目の相馬勤（札幌医大）（写真55）は、手術が得意で、優れた手術成績で成果をあげた。3代目部長は佐野修一、4代目部長は現在の瀧上真良（札幌医大）（写真56）である。救命救急センターが充実しているので、重症の脳卒中や、多重外傷を伴った重症の外傷患者を受け入れ、市民の健康のために貢献している。年間手術件数は200件である。



写真54: 竹田保



写真55: 相馬勤



写真56: 瀧上真良

### (2) 柏葉脳神経外科病院

昭和46年、柏葉武（北大）（写真57）が開設した。柏葉は、北大脳神経外科の精神の“患者第一”を貫き、患者から信頼され業績をあげた。やがて、川口進（北大・弘前大）が副院長として赴任し発展した。平成15年、金子貞男（北大）（写真58）が2代目院長に就任した。年間手術



写真57: 柏葉武

件数は400件。病院評価では、3A評価を受けた。脳梗塞に対するt-PA治療実績は、全国でも上位を誇っている。

### (3) 禎心会病院

昭和59年、徳田禎久（札幌医大）（写真59）が、中村記念病院より独立して開業した。徳田は論客で、医政や医療問題に数々の提言をしてきており、全日本病院協会理事、北海道病院協会理事長を務めている。また、いち早くDPC対象機関を打ち出した。年間手術件数は100件である。サテライトに「稚内禎心会病院」がある。



写真58: 金子貞男



写真59: 徳田禎久



写真60: 三森研自



写真61: 会田敏光



写真62: 齊藤久寿

### (5) 札幌麻生脳神経外科病院

昭和61年、齊藤久寿（北大）（写真62）が開業した。当初より、脳血管障害、脳腫瘍、脊髄疾患をバランスよく診療し、実績をあげた。看護師スタッフが優秀で、一時は全国的にも有名になった。やがて秋野実（写真63）が院長になり、今は村田純一（写真64）が3代目院長を務めている。神経内科も併設した。年間手術件数は550件である。



写真63: 秋野実



写真64: 村田純一

### (6) 新さっぽろ脳神経外科病院

昭和63年、中川俊男（札幌医大）（写真65）が開業した。中川は精力的に診療し、たちまち実績をあげた。平成13年、端和夫（札幌医大教授）を名誉院長に迎えた。



写真65: 中川俊男

中川は、端とともに脳ドックの提唱者で、日本脳ドック学会を立ち上げ、事務局を設置した。

中川は、医師会でも活躍し、日本医師会の副会長を務めている。年間手術件数は250件である。

### (7) 手稲溪仁会病院 脳神経外科

平成元年に開設され、小柳泉（北大）（写真66）が初代部長として赴任した。その後、中川翼（北大）（写真67）、布村充（北大）（写真68）、寺坂俊介（北大）（写真69）と部長が交代し、現在は板本孝治（北大）（写真70）が部長を務めている。病床数は32床であるが、その他に、脳卒中ケアユニット6床、救命救急19床を有し、統合すると60床近くになる。ヘリポートを有し、重症の救命救急患者を積極的に受け入れており、地域医療への貢献は大きい。年間手術件数は350件である。



写真66: 小柳泉



写真67: 中川翼



写真68: 布村 充



写真69: 寺坂俊介



写真70: 板本孝治

## 4) 道北地区

### (1) 旭川赤十字病院 脳神経外科

昭和42年に開設され、高村春雄（北大）（写真71）が初代部長として赴任した。当初から救急患者を積極的に受け入れ、道北地方の医療に大きく貢献している。副部長の後藤聡（北大）（写真72）も、昼夜を問わず努力が認められて副院長となり、やがて現在は病院長として経営手腕を発揮している。現在の部長は上山博康（北大）（写真73）で、有名な“神の手”によって、脳動脈瘤400件、バイパス術60件（年間）をこなし、外来患者の診察が終了するのは深夜に及ぶという。年間手術件数は750件である。筆者は北大時代に、上山の脳動脈瘤の手術を見て、以後の全ての血管障害の手術を上山に任せた。病



写真71: 高村春雄



写真72: 後藤 聡



写真73: 上山博康

院の救急に対する姿勢は変わらず、ヘリコプターを有して重症の救急患者を積極的に受け入れている。

## (2) 名寄市立総合病院 脳神経外科

平成4年に開設され、佐古和廣（北大、旭川医大）（写真74）が初代部長として赴任した。その後、中井啓文（旭川医大）（写真75）が2代目部長として赴任し、佐古が再び部長として赴任し、平成15年からは院長に就任して部長も兼任している。開設当時より、旭川以北の広域な医療圏をカバーし、地域の救急医療に貢献してきている。年間手術件数は200件である。

佐古は院長としても活躍しており、産科を充実させ、地域に貢献している。また、多忙ながらも「道北脳卒中共同研究」を立ち上げ、学術的な活動も継続している。サテライトに「枝幸町サテライトクリニック」がある。



写真74: 佐古和廣



写真75: 中井啓文

## 5) 北見地区

### (1) 網走脳神経外科・リハビリテーション病院

平成2年、橋本政明（旭川医大）（写真76）によって開設された。またたく間に実績をあげて、現在、橋本は理事長になり、谷川緑野（旭川医大）（写真77）が院長を務めている。急性期から慢性期までを含めての一貫した医療を目指し、ステージに応じたりハビリテーションを特色としている。谷川は手術を得意として、自ら“上山二世”と名乗り、年間300件の手術をこなしており、学会でも元気な発言をしている。橋本は経営手腕に優れ、短期間に病院を発展させ、北見市内にサテライトの「道東脳神経外科病院」を開設した。



写真76: 橋本政明



写真77 谷川緑野



写真78: 柏葉 武

## 6) 道東地区

### (1) 釧路労災病院 脳神経外科

昭和41年に開設され、柏葉武（北大）（写真78）が初代部長として赴任した。道内の公立病院としては、昭和40年の市立札幌病院脳神経外科に次いで、二番目の



写真79: 阿部 弘

開設であった。しかしながら、脳神経外科医は柏葉部長一人のみで、外来、病棟、手術の全てをこなした労苦は、筆舌に尽くしがたいものであった。柏葉は、わずか1年で北大講師に就任して大学へ戻った。昭和42年、阿部弘（北大）（写真79）が2代目部長として赴任した。北大から研修医一人が3ヵ月交代でくるようになった。道東唯一の脳神経外科なので、頭部外傷、脳血管障害、脊髄損傷などの患者が連日運び込まれて、阿部は週末の外出もできず、1年間の大半を宿舎のある病院の構内で過ごした。昭和43年、角田実（北大）（写真80）が3代目部長として赴任した。角田は、脊髄疾患、脳動脈瘤の手術で実績をあげ、釧路労災病院の名を全国区にした。次いで、小岩光行（北大）（写真81）、斉藤久寿（北大）（写真82）、中川翼（北大）（写真83）が部長を務め、現在の井須豊彦（北大）（写真84）部長に至っている。中川翼は、脳血管障害で多くの実績をあげ、学会や論文発表も活発であった。井須は、脊髄疾患の外科で全国区となり“これが私の手術法、脊椎脊髄手術”を出版した。年間手術件数は400件である。



写真80: 角田 実



写真81: 小岩光行



写真82: 斉藤久寿



写真83: 中川 翼



写真84: 井須豊彦

### (2) 市立釧路総合病院 脳神経外科

昭和51年に開設され、高田育郎（札幌医大）（写真85）が、初代部長として赴任した。高田は精力的に診療し、救命救急センターを立ち上げ、道東地区の中心病院として多くの実績を残した。2代目部長の上出延治（札幌医大）（写真86）は、activityが高く、難しい手術にも挑戦して成果をあげ、地方会では元気であった。

次いで、森本繁文（札幌医大）（写真87）、野中雅（札幌医大）（写真88）が部長を務め、現在の今泉俊雄（札幌医大）（写真89）部長に至っている。ヘリポートを整備し、重症外傷を積極的に受け入れ、年間手術件数は200件である。



写真85: 高田育郎



写真86: 上出延治

## Ⅶ. 北海道の地方学会（表7）



写真87: 森本繁文



写真88: 野中 雅



写真89: 今泉俊雄

### (3) 釧路孝仁会記念病院

平成元年、齋藤孝次（札幌医大）（写真90）によって開設された。当初は釧路脳神経外科病院として開設されたが、齋藤は熱い情熱をもって診療にあたり、目覚ましい発展をとげて、釧路市内のサテライトの2病院を含めて集約し、孝仁会記念病院とした。ヘリポートを有し、急性期から慢性期を含む脳卒中が中心ではあるが、3テスラのMR装置やPETを有し、心臓疾患、がんに対する高次医療も行っている。年間手術件数は500件である。



写真90: 齋藤孝次

### (4) 帯広厚生病院 脳神経外科

平成11年に開設され、大瀧雅文（札幌医大）（写真91）が、初代部長として赴任した。大瀧は、札幌医科大学時代から、虚血脳の病態、3D-CTAの研究、巨大脳動脈瘤の手術などで成果をあげていた。帯広でも、学術的なレベルを保ちながらも、救命救急センターを立ち上げ、十勝地区の高次救急・災害医療センターの中核として活躍し、十勝地域の医療に多大な貢献をしてきた。年間手術件数は300件である。



写真91: 大瀧雅文



写真92: 鎌田 一

### (5) 北斗病院

平成5年、鎌田一（札幌医大）（写真92）が開設した。斬新なアイデアによって目覚ましい発展をとげた。脳神経外科のみでなく、オーダーメイドのがん免疫療法、PETセンターとして多数の検診も行い、道内のみならず、道外からも患者が訪れている。現在、鎌田は会長となり、橋本郁郎（札幌医大）（写真93）が理事長、井出渉（札幌医大）（写真94）が院長を務めている。年間手術件数は600件である。



写真93: 橋本郁郎



写真94: 井出 渉

### 1) 北海道脳神経外科懇話会

#### → 日本脳神経外科学会北海道支部会

昭和51年に、第1回北海道脳神経外科懇話会が開催された。これは当時としては画期的なことであった。それまでは、脳神経外科のみの学会はなく、もっぱら神経学会地方会、あるいは外科地方会で発表したり、議論したりしていた。そこで、脳神経外科医のみによる会をもち、フランクで忌憚のない議論をしようという機運が盛り上がり、懇話会の誕生となった。第1回目の会長は橋場輝芳（札幌医大）、第2回目の会長は都留美都雄（北大）であったが、実際に、会の根幹を構築し、準備に尽力したのは、宮崎雄二（札幌医大）であった。当時の事務局のノートに、宮崎は次のような文を書いた。“井戸の水を飲む時に、井戸を掘った人の苦勞を忘れてはならない！”。

この懇話会の設立は大成功で、毎回活気あふれる議論が展開され、終了後には必ず懇親会が開催され、互いに親交を深めた。懇話会は、年2回開催され、昭和53年、第6回の時に、日本脳神経外科学会北海道地方会と名称が変更された。平成23年で第68回目を迎えた。筆者は、第1回目からほとんど皆勤で出席してきたが、多くのことを学んだ。

昭和50年代の後半に、橋場・都留時代から、米増・佐藤・阿部時代へと教授陣が変遷した。阿部は教室内の若手の学会予行の時に、“いちゃもん米増”からの予想される質問、及び鋭い切れ味の佐藤修の予想される質問に対して、若手へ返答の内容を教えるのが常であった。しかしながら、端の時代になると、端は、発表者ではなく、術者に対する質問をすることが多く、阿部はそのたびに返答し、熱い議論となった。

### 2) 北海道脳血管障害研究会

#### → 北海道脳卒中学会

昭和54年に設立された。発起人は、都留美都雄（北大）及び大学以外の第一線病院の脳神経外科医並びに若手の神経内科医、内科医系であった。基礎研究や内科系の発表もあり、バランスのとれた学会として発展し、やがて脳卒中研究会と名称が変り、脳卒中に対する内科的治療や病態に関するレベルの高い発表が増えている。平成23年で43回目を迎えた。

### 3) 北海道脳SPECT研究会

#### → 北海道脳PET・SPECT研究会

古舘正従（北大放射線科）と阿部弘（北大）が、代表世話人となって、平成3年に設立された。やがて、PETが北大で稼働するようになり、PET・SPECT研究会と名称が変更された。この会の特色は、実際にPETやSPECTを扱う放射線技師の人達の発表が全演題の半数を占め、しかもレベルの高い発表が多く、議論も活発なことである。平成23年で20回目を迎えた。

ちなみに、北海道における脳PET・SPECTの検査件数並びに脳の検査のアイソトープ使用量は、人口比及び施設比でいうと全国一である。その理由は、北海道の脳神経外科医がSPECT検査に熱心なことと、北海道では、急性期の脳卒中のすべてを脳神経外科医が診ていること（後述）によると思われる。

### 4) 北海道脳神経血管内治療研究会

#### → 日本脳神経血管内治療学会北海道分会

瓢子敏夫（中村記念）が中心となり、数名の血管内治療医と若干の脳神経外科医が幹事となって平成11年に設立された。その後、日本脳神経血管内治療学会北海道分会へと発展した。設立当初から熱気あふる会で、毎年新しい器材や技術が発表されており、聞き逃さない会となっている。すでに血管内治療専門医は道内で20名を越えており、今や会の運営は全て血管内治療専門医によってなされている。瓢子は永年の功績が認められて、何とWFITN（世界脳神経血管内治療学会）の会長（2010年）を務めた。野中雅（白石脳外）及び牛越聡（北大）が瓢子と共に会を世話している。

| 表7 北海道の地方学会 |                                                                 |
|-------------|-----------------------------------------------------------------|
| 昭和51年       | 第1回 北海道脳神経外科懇話会（年2回）<br>第6回 北海道脳神経外科懇話会<br>→ 日本脳神経外科学会 北海道分会となる |
| 平成23年       | 第68回 日本脳神経外科学会 北海道支部会                                           |
| 昭和54年       | 第1回 北海道脳血管障害研究会                                                 |
| 平成23年       | 第43回 北海道脳卒中研究会                                                  |
| 平成3年        | 第1回 北海道脳SPECT研究会                                                |
| 平成23年       | 第20回 北海道脳PET・SPECT研究会                                           |
| 平成11年       | 第1回 北海道脳神経血管内治療研究会                                              |
| 平成23年       | 第12回 日本脳神経外科血管内治療学会<br>北海道分会                                    |

## VIII. 北海道の脳神経外科の特色

1) 基礎的研究にしろ、臨床研究にしろ、北海道の脳神経外科の研究には独創的なものが多い。治療法にしても、ユニークで新しいものが多い。その理由は、本州のような過度の情報に惑わされない（？）で、マイペースで仕事ができることと、三大学ともおおらかで、市中病院にとっては、大学とのしがらみや規制に煩わされることなく（？）自由な発想ができるからと思われる。

ただ、欠点としては、研究の発表を北海道内にとどめてしまい、全国ないしは世界へ向けて発信したり、論文を書いてグローバルレベルでの評価をうけるという意欲に欠けることである。悪くいえば、井の中の蛙で、北海道に安住して津軽海峡を渡ることに躊躇して、本州の人達と競争するという気概に欠けていることである。このことは、三大学についてもいえる。

2) 北海道では、超急性期から慢性期までの脳卒中患者の全てを脳神経外科医が診ているといっても過言ではない。したがって、超急性期の脳梗塞患者の多くはSPECT検査を受けることになる。破裂脳動脈瘤や脳出血の患者は、発症後短時間で道内の脳神経外科施設へ搬入されている。

慢性期やリハビリテーションを要する患者の受け入れが不十分で、脳神経外科医が悩むことが以前にはあった。しかし最近では、市中の脳神経外科病院自らが、慢性期の病床を有したり、リハビリテーション病院と連携したり、リハビリテーション病床を設置したりして、急性期から慢性期までの一貫した医療を目指す施設が多くなった。患者にとっては大きな福音である。

3) 北海道では、脳卒中や外傷などの救急患者が、発症後、速やかに脳神経外科の専門病院へ搬送されるシステムが構築されている。これは、各地域の脳神経外科医の絶大な協力と熱意によるものであり、北海道では、脳卒中や外傷の救急患者のたらい回しは皆無である。北海道の郡部は広域であるが、搬送網は発達しており、離島や辺地からはヘリコプターによる搬送が行われている。

以上、北海道の脳神経外科の特色を簡単に述べたが、北海道の脳神経外科医は、永年にわたって懸命に北海道民の健康を守るために貢献してきたことを誇りに思いながら筆を置く。（完）

本稿の要旨は、2008年7月20日、第11回日本病院脳神経外科学会（中村博彦会長）に於いて発表された。

### 参考資料

〈旭川医科大学〉

1. 米増祐吉教授退官記念業績集, 1997

〈中村記念病院〉

1. 中村記念病院開院30周年誌, 「Humanities 人と生命をみつめて」, 1997
2. 中村順一追悼集, 2002
3. 中村記念病院開院40周年誌, 「Leap to the Glory さらに飛躍へ」, 2007

### 謝 辞

資料を御提供いただいた下記の先生方に深く感謝いたします。

|                       |                    |
|-----------------------|--------------------|
| 旭川医科大学：               | 田中達也 教授<br>(現名誉教授) |
| 大神脳神経外科クリニック：         | 大神正一郎 院長           |
| 旭川医科大学：               | 鎌田恭輔 教授            |
| 中村記念病院：               | 中村博彦 理事長           |
| 市立函館病院 脳神経外科：         | 丹羽潤 部長             |
| 函館脳神経外科病院：            | 西谷幹雄 理事長           |
| 函館新都市病院：              | 伊藤丈雄 理事長           |
| 小樽市立脳・循環器・こころの医療センター： | 馬淵正二 院長            |
| 越前谷脳神経クリニック：          | 越前谷幸平 院長           |
| 大川原脳神経外科病院：           | 大川原修二 理事長          |
| 同                     | 松本行弘 院長            |
| 王子総合病院 脳神経外科：         | 柏原茂樹 部長            |
| 市立札幌病院 脳神経外科：         | 瀧上真良 部長            |
| 柏葉脳神経外科病院：            | 柏葉武 名誉理事長          |
| 禎心会病院：                | 徳田禎久 理事長           |
| 北海道脳神経外科記念病院：         | 会田敏光 院長            |
| 札幌麻生脳神経外科病院：          | 斉藤久寿 理事長           |
| 新さっぽろ脳神経外科病院：         | 中川俊男 理事長           |
| 旭川赤十字病院 脳神経外科：        | 上山博康 部長            |
| 名寄市立病院：               | 佐古和廣 院長            |

網走脳神経外科・リハビリテーション病院：

橋本政明 理事長

釧路労災病院 脳神経外科：

井須豊彦 部長

市立釧路総合病院 脳神経外科：

今泉俊雄 部長

釧路孝仁会記念病院：

齋藤孝次 理事長

帯広厚生病院 脳神経外科：

大瀧雅文 部長

北斗病院：

新田一美 部長

なお、本稿の作成に御協力いただいた公益財団法人北海道脳神経疾患研究所 資料課 医誌編集委員会 中村正文様、札幌秀友会病院 管理課 石川寛則様に感謝いたします。